

「道の駅」とその周辺施設との関連についての一考察*

—栃木県を対象として—

Study on Relationship between a Road Station
and other Facilities around in case of Tochigi Prefecture

北村博昭** 為国孝敏*** 中川三朗****

By Hiroaki KITAMURA, Takatoshi TAMEKUNI and Saburo NAKAGAWA

1.はじめに

平成5年度から始まった第11次道路整備五箇年計画の施策として、整備が進められてきた「道の駅」登録認可制度は、今年で8年目を迎えた。制度が始まった当初は、全国で103箇所が「道の駅」として登録されたが、その後計15回の登録証が交付され、平成11年8月末現在(図-1)には全国で551箇所の「道の駅」が誕生している。

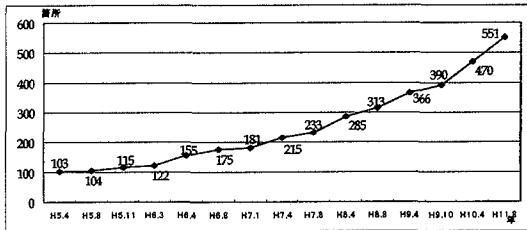


図-1 「道の駅」登録状況

全国に点在する「道の駅」で、温泉施設、宿泊施設、キャンプ場、体験農園、美術館、博物館等、様々な趣向を凝らした施設が整備されており、「道の駅」自体の利便性向上が図られてきている。しかし、本来の「道の駅」の基本機能である「休憩機能」、「地域連携機能」、「情報交流機能」の3つの機能を確実に果たしているとは考えにくい。例えば、「道の駅」の近隣に、既に同様な機能を持つ施設が立地しているケースも見られる。そこで本研究では、「道の駅」と「道の駅」に似た機能を持つ施設の利用実態について調査し、両者の比較から、考察することを目的とする。

** 学生員 足利工業大学大学院土木工学専攻

(〒326-8558 栃木県足利市大前町 268-1 Tel:028462-0605)

*** 正会員 博(工) 足利工業大学工学部土木工学科助教授

**** 正会員 博(工) 足利工業大学工学部土木工学科教授

キーワード: 道の駅、交通施設計画、立地

2. 「道の駅」の設置基準

「道の駅」の設置にあたっては、次のような基準が設けられている。「道の駅」は、地域の意向に基づく地域振興施設でもあるために、間隔を定めて設置するものではないが、休憩施設としての利用しやすさや、「道の駅」相互の機能分担の観点から広域的な視点での設置が望まれる。また、アクセス道路や案内標識を整備した上で、主要な幹線道路から引き込んだ位置に設置することも考えられる¹⁾。

3. 栃木県内における「道の駅」

栃木県内には現在、「にのみや」、「もてぎ」、「ばとう」、「湯の香しおばら」、「明治の森・黒磯」、「那須高原友愛の森」の合計6箇所(図-2)の「道の駅」

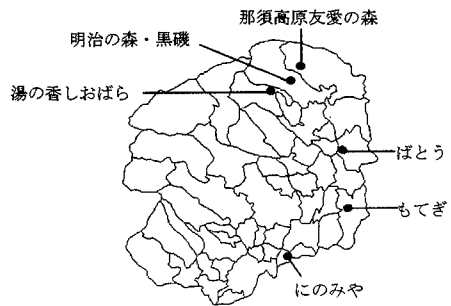


図-2 栃木県内「道の駅」開設場所

が開設されている(平成12年11月「東山道伊王野」が開設予定)。県内の「道の駅」は、県の東側に3つ、北部に3つと偏って開設されている。なかでも、北部の3つの「道の駅」は、一番南よりある「湯の香しおばら」から、一番北にある「那須高原友愛の森」まで、車で30分の距離にあり「明治の森・黒磯」は2つのほぼ中間に位置しており、隣り合う「道の

駅」と「道の駅」とが車で15分ほどの距離に開設されている。

さらに、この3つの「道の駅」周辺には名所、特産品販売所、ポケットパーク、レジャー施設、美術館、野菜直売所、調整池を利用した公園など様々な施設が点在している。これらの施設は、「道の駅」の3つの基本機能である「休憩機能」、「地域連携機能」、「情報交流機能」をすべて兼ね備えているものは少ないが、2つ、もしくは1つの機能を確実に果たしているものは存在している。つまり、「道の駅」ではなくても、「道の駅」に準ずる役割を果たしているのではないかと考えることができる。

そこで、この地域の「道の駅」の1つ「湯の香しおばら」を取り上げて、「道の駅」とその周辺施設の利用状況を把握する。

3. 調査対象施設

今回の調査では、「道の駅」湯の香しおばらと、その周辺施設として千本松牧場を対象とした(図-3)。湯の香しおばらは、栃木県北部の塩原町にあり、塩原温泉郷の玄関口として、東北自動車道西那須野塩原ICから車で約10分の国道400号に位置し、塩原温泉郷の観光案内を行っている最後の施設であり、

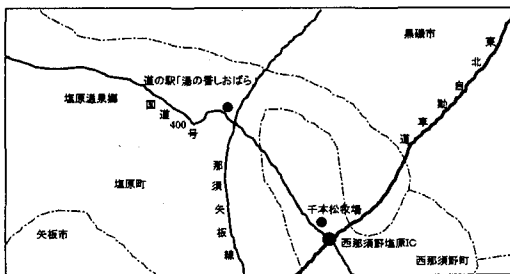


図-3 「道の駅」湯の香しおばら周辺図

年間を通じて約40万人の利用客で賑わいを見せている。

一方の千本松牧場は、東北自動車道西那須野塩原ICから湯の香しおばらまでのおよそ5kmの区間にある。広い駐車場を完備し物産販売を行っているなど、道の駅と似たような機能を持つ施設の一つであり、東北自動車道西那須野塩原ICからは車で約2分、国道400号を塩原方面に向かって最初

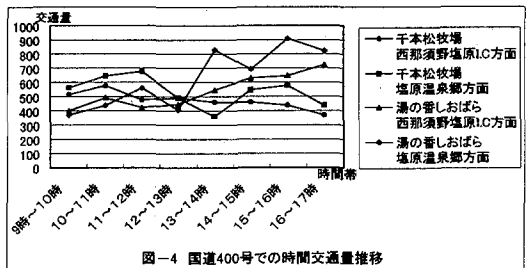
に見られる施設である。この他にも5つほどの休憩、食事、物産販売を行っている施設が点在しているが、東北自動車道西那須野塩原ICに最も近いことから、塩原温泉郷の玄関口、またはこの地域の最終観光施設と考え、今回の調査対象施設とした(図-3)。

4. 調査方法

「道の駅」湯の香しおばら、千本松牧場、2つの施設の利用状況を把握するため、平成12年6月18日(日)午前9時から午後5時まで、各施設にて交通量調査を行った(この時間帯で調査を行ったのは、湯の香しおばらの営業時間にあわせたものである)。調査は2つの施設前を通る国道400号線の交通量と、それぞれの施設への流入・流出交通量を調べた。

5. 調査結果・分析

国道400号の時間交通量(図-4)を見ると、湯の香しおばら、千本松牧場ともに西那須野塩原IC方面へ



の交通量は時間が遅くなるにつれて増加し、反対に塩原温泉郷方面への交通量は、時間帯が遅くなるにつれて減少している。これはこの地域が観光地であるために、午前中は東北自動車道を利用した車が観光地へ向かい、午後はその車が戻っているものと考えられる。次に各施設についての流入・流出交通量(図-5)を見てみる。

湯の香しおばらにおける総流入交通量は1,138台であり、西那須野塩原IC方面からの流入は557台、塩原温泉郷方面からの流入は581台と大きな差は見られなかった。また、時間帯別の流入の傾向もほぼ同じで、時間帯が遅くなるにつれて減少している。一方、流出交通量(図-6)は全時間帯において西那須野塩原IC方面への流出が上回っており、流出交通量

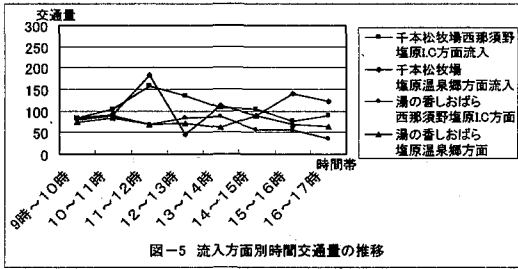


図-5 流入方面別時間交通量の推移

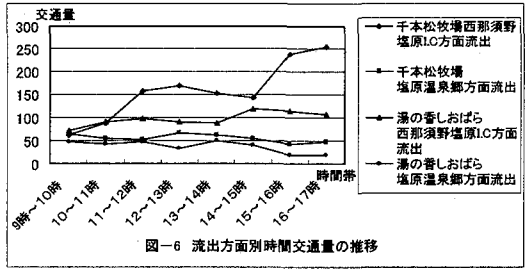


図-6 流出方面別時間交通量の推移

全体の7割が、湯の香しおばらを利用後に西那須野塩原IC方面に流出している。また、時間帯別では流入の傾向とは全く反対で、時間帯が遅くなるにつれて西那須野塩原IC方面へは増加し、塩原温泉郷方面へは減少を示した。これは、観光を終えた人たちが帰宅するためと考えられる。

次に、千本松牧場では、流入交通量(図-5)が1,723台と、湯の香しおばらの1.5倍の流入交通量を数えた。方面別にみると、西那須野塩原IC方面からの流入は856台、塩原温泉郷方面からの流入は867台とこちらも流入に関しては大きな差が見られなかった。しかし、時間帯別の傾向には違いが生じた。一方、流入は西那須野塩原IC方面、塩原温泉郷方面いずれも11時～12時で流入のピークを迎えている。これは、千本松牧場が昼食を取るために利用されているためと考えられる。そして、西那須野塩原IC方面からの流入は減少傾向を見せたが、塩原温泉郷方面からの流入は一旦減少をみせたものの再び増加し、15時～16時で2回目のピークを迎えた。この2回目のピークは観光を終えた人たちが、帰宅のために立ち寄ったものと考えられる。流出交通量(図-6)は西那須野塩原IC方面へは時間帯が遅くなるにつれて増加しているが、塩原温泉郷方面へは時間帯別ではあまり変化が見られなかった。これを流出割合で見ると、湯の香しおばら同様、7割の車が西那須野塩原IC方面への流出を示した。

以上、述べてきたことから、次のようなことが考えられる。

「道の駅」湯の香しおばらは、塩原温泉郷の玄関口とも言える位置に開設され、塩原温泉観光宿泊案内所を構えるなど、塩原温泉郷の案内所として期待されて、建設された。しかし、「道の駅」への流入の割合が両方向からほぼ同じにも関わらず、「道の駅」利用者の7割が西那須野塩原IC方面へ流出してい

る。つまり、西那須野塩原IC方面からの利用者も施設利用後は元の方向、西那須野塩原IC方面へ逆戻りしていることになる。これでは先に述べた塩原温泉郷の玄関口としての役割を果たしているとは考えにくい。

また、一方の千本松牧場は、西那須野塩原ICへ最も近いこともあり、そちらへの流出が多いことから周辺の観光の最終拠点として、帰宅の前の一時休憩、またはおみやげを購入する目的で利用されているのではないかと考えられる。さらに12時前後の利用が著しく多く、千本松牧場への流入全体の2割をこの1時間に記録しているところから、食事利用が主要な目的の一つとしてあげられる施設であると考えられる。

全交通量と施設との関係を見ると、湯の香しおばら、千本松牧場ともに、施設前を通る車の施設利用率が高いという結果が表れた(表-1)。

表-1 湯の香しおばら・千本松牧場における交通量に対する流入割合

湯の香しおばら	交通量(台)	流入(台)	流入割合
西那須野塩原IC方面	3800	557	15%
塩原温泉郷方面	4307	581	13%
千本松牧場	交通量	流入	流入割合
西那須野塩原IC方面	4300	856	20%
塩原温泉郷方面	5027	867	17%

各施設ごとに見ると、「道の駅」湯の香しおばらにおいては、西那須野塩原IC方面、塩原温泉郷方面からの交通量に対して、ほぼ同割合の15%、13%となっている。

また、千本松牧場では西那須野塩原IC方面からの流入が20%を数え、塩原温泉郷方面からの流入も17%と、いずれも湯の香しおばらを超える値を示した。

このことから、この地域では「道の駅」湯の香し

おばらよりも、千本松牧場の方が、より多くの利用があることが分かった。

5. 考察

「道の駅」とそれに似た機能を持つ施設として、千本松牧場を対象に調査を行った。千本松牧場は、広大な敷地の中に牛や馬などを放牧するなど、行楽・休憩の面で考えれば、湯の香しおばら以上の効果があると考えられる。その他、おみやげなども販売しており、「道の駅」湯の香しおばらと変わらぬ、側面を持った施設である。しかし、その他の機能を考えた場合、やはり足りない部分を感じられる。今回は詳しい調査は行わなかったが、周辺にはそれを補うだけの機能を持った施設が複数存在する。すなわち、当該地域では必ずしも「道の駅」に全ての機能を求める必要はないものと考えられる。さらに、以前の調査²⁾で「道の駅」の利用者全体の7割が「休憩」を利用目的として回答、次いで4割の利用者が「トイレ」を利用目的として回答した(図-7)。このことから「道の駅」の利用者は「道の駅」

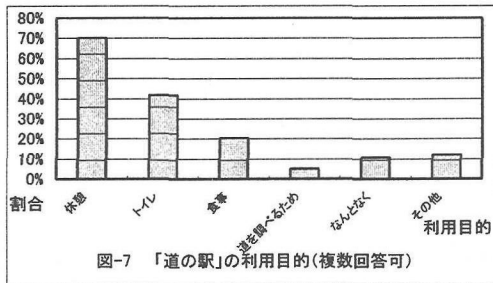


図-7 「道の駅」の利用目的(複数回答可)

を「休憩の場」として捉え利用しているものと考えられる。したがって、「道の駅」にある地域振興施設の利用は、利用者側からしてみれば直接、利用するものではなく「休憩」の際に利用する二次利用が主な目的として考えられる。つまり「道の駅」に求められる機能として、重点を置くべき機能は、「休憩機能」であると考えられる。したがって、「道の駅」の利用者に十分な休憩ができる趣向を凝らした様々な施設を提供することも重要ではあるが、それ以上に「道の駅」の設置場所が重要な課題であると考えられる。このことは、どこに設置したらドライバーにより効果的な休憩の場を提供できるかという、「道の駅」の本来の目的でもある「たまり」の発想につながるも

のと考える。

6. まとめ

今回の調査では、「道の駅」と周辺施設の交通量から見た利用状況を把握し、その結果はそれぞれの施設の特徴を表した結果が出たと考えられる。しかし「道の駅」については、3つの基本機能の中でも休憩機能を中心とした利用のされかたをしているのではないかと考えられ、他の機能がうまく利用されているかどうか判断するには難しい。そこで今後は調査対象を広げ、データの回収を行う必要があると考える。

参考文献

- 1) 建設省道路局:「道の駅の本 個性豊かなにぎわいの場づくり」、財団法人道路保全技術センター、1993年
- 2) 北村博昭 他:「栃木県内の「道の駅」の現状についての一考察」、土木学会第55回年次学術講演会(投稿中)、2000年